岩手・中尊寺伝三重池跡

1 所在地　岩手県西磐井郡平泉町字衣関

2 調査期間　一九六〇年（昭35）七月～一九六七年七月

3 発掘機関　平泉遺跡調査会（代表藤島亥治郎）

4 調査担当者　吉永義信・吉川　需　他

5 遺跡の種類　寺院内苑池跡

6 遺跡の年代　一二世紀初頭

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

関山は標高わずか一四〇ｍほどの丘陵であるが、北裾を衣川が流れ、東には北上川が流れている。軍事的にも卓越した立地要件を備え、古代より辺境に対する重要な拠点として、この丘陵に衣関が設けられていた。

この地に中尊寺が造営されたのは一二世紀初頭で、前九年・後三年の両役に生き残った奥州藤原氏の初代清衡による。当初の堂宇は天治元年（一一二四）建立の金色堂が残るのみで、他は建武四年（一三三七）に焼失したと伝えられている。木簡が出土した三重池跡は、金色堂の北約五〇ｍのところにあり、中尊寺蔵の寛永一八年一山絵図に三つの池が相接して描かれている。南西から北東へ階段状に接した玉石積護岸による池が二段目まで確認されたが、三段目は沢への落ち込みのため確認されなかった。地形にしたがったこの池の形態はきわめてユニークなもので、いわゆる寝殿造庭園や浄土庭園形式とは異なった形式のものである。池底からは大量のかわらけ類が出土し、これらから見て清衡の造営と推定される。七三一点の木片が木器や橋脚残根などとともに第一段池最下底部から出土したが、墨書が確認されるのはこの一点だけで、他に紐通しの様な穴のあいた木札二点には墨の痕跡らしいものが認められる程度であった。この木簡は下端を欠くが、法会の行道に関するものであろう。

（水沢・一関）

8 木簡の釈文・内容

(1)　「右方　定者　□」　(100)×19×3　019

9 関係文献

平泉遺跡調査会・中尊寺『中尊寺―発掘調査の記録―』（一九八三年）

（荒木伸介）